

⑰ 神 變 大 菩 薩 と 山 上 講

神變大菩薩と聞くと何やら妖しげな雰囲気をもって受け止められますが、これは修験道の開祖役小角（役行者）の歿後1100年忌にあたる寛政11年（1799）に時の光格天皇が役小角に贈った諡です。

写真は、洪庵トンネル北口西、足守上植之町の町裏にある石碑です。役行者神變大菩薩と刻んであります。

下川崎町・上土田の大峯山供養塔は、寛政11年以前に建立されていますが、この碑は、役小角に神變大菩薩と贈り名された時以降、これを記念して建てられたものと考えることが出来ます。

そしてこのことは、1300年の昔に役行者が開いたという大和の大峯山（山上ヶ岳）の行場へ巡拝する山上講が、この付近にあったことを証するものと考えて良さそうです。

役行者の人物像は、鬼神を使役出来るほどの法力を持ち伊豆大島から富士山まで海上を歩いて渡った。など、荒唐無稽な話が多く史実とかけ離れていますが、歴史上実在の人物で、修験道の霊場には、役行者を開祖としたり、役行者修行の場と伝わる所がたくさんあります。岡山県美作市東栗倉の後山（兵庫県からは行者山と言います。）は、役行者開祖の霊場と伝わり、大和の大峯山に対して西の大峯山と呼称されました。

山上講は、江戸時代の中頃、伊勢講や金比羅講が盛んとなったと同じ時期に在地の山伏（寺）により広められたのではないのでしょうか。山伏は、時代劇映画などでは、定住地を持たぬ漂泊の悪役に仕立てられることが間々ありますが、実際は地域に根ざした暮らしをし、

学問があり、教養を持った者が多かったのです。

文字の読めない多くの村人に、霊力で病を治し、日照りには雨乞いをするなど祈祷活動を通じて指導してゆくためには、単なる呪術だけでなく学問、教養が必要でした。実際多くの山伏は、修験道を極めることのほか漢学、医学、仏教を研究し、平常は修験活動のほか医療、寺小屋を経営する者も多くありました。（昭和54年 山岳宗教研究叢書12）

さて、足守・下川崎町のトンガラシ地蔵堂の中に、錫杖を持ち高下駄を履いた役行者を浮き彫りにした石碑があります。台座石に大峯三十三度供養 高天寺同行 阿



足守上植之町の神變大菩薩



川崎町トンガラシ地蔵堂の役行者像

曾屋利兵衛天明2年（1782）9月吉日とあります。この主意は、修業のため大和大峯山へ通った阿曾屋利兵衛が遂に33回の偉業を達し、天明2年9月の良き日に石碑を建立し供養したというものです。親譲りの二本の足を頼りに備中の国から大和の国大峯山まで33回往復するなど並大抵のことではありません。信心とはこういうものでありましょう。



山伏修業の真髓は、捨身にあるといいます。捨身することで浄土に生まれかわるという信仰を身をもって実践する場所が行場と言われるものです。その一つ、西の覗きの神文は「ありがたや西の覗きに懺悔して弥陀の浄土に入るぞ嬉しき。」とあります。

さて地区内もう一つの大峯供養塔は、足守・上土田八反田の地藏堂北隣にある高さ2 m 余の石塔がそれです。



塔身に次のとおり刻んであります。大峯山上三十三度供養塔 高天寺同行 先達難波善左衛門永世祈口信士 明和4年（1767）9月吉日。つまり、難波善左衛門を先達とする講仲間が33回の行を達し、記念の供養塔を建てたと言うものです。同行が阿曾屋利兵衛と同じ高天寺となっています。



なお、大井筒井坂地区では天台宗寺門派登蓮寺で昭和40年代頃まで山上講が続いていたそうです。

岩田村史も村内に山上講があったことを記しますが、現地を訪問してもなかなか知る人に出会えません。

稲荷社、摩利支天を祀った小祠と、自然石に文化12年3月10日 金比羅大権現 中組・下組講中と刻まれた金比羅燈籠の棹部と思われるものが転がっています。山伏の御札にはよく奉唱百万遍の言葉がみえますが千二百万遍とは？

石妻大西地区の松重院あたりが気に掛かります。今は建物は崩壊し、境内の片隅に南無阿弥陀仏千二百万遍為二世安楽の石碑と天保15年備中国足守神子信濃による七社大明神、

